

シンポジウム

「文字文化を問い直す——新出出土資料から見る百済・新羅・倭——」を終えて

瀬 間 正 之

一 シンポジウムを終えて

二〇一〇年度秋季大会上代文学会シンポジウム「文字文化を問い直す——新出出土資料から見る百済・新羅・倭——」は、一〇月三〇日、時季外れの台風接近に伴う荒れ模様の中、お茶の水女子大学で予定どおり開催された。帰りの交通機関の乱れを配慮し、補足説明を省略、質疑応答も時間を短縮し、予定より五十分早く閉会するなどの措置も取らざるを得なかったが、ともあれ無事終了した。

開催趣旨は以下の通りである。

歌木簡の論議が盛り上がる昨今、出土資料を踏まえることなく上代文学を語ることは困難となりつつある。半島・列島から続々と発見される古代木簡、昨年五月発見された新羅最古の金石文、浦項・中城里碑文など

も記憶に新しい。また、同時代の文字資料に乏しかった百済の故地からも王興寺址・弥勒寺址から金石文が出土し、古都扶余からは数十点の木簡も出土している。こうした最新の出土資料を踏まえて、古代半島・列島の文字文化を問うことで、改めて上代文学を捉え直す契機としたい。

講師は、ソウル中央博物館の李鎔賢氏、早稲田大学の李成市氏、関西大学の乾善彦氏の三方にお願いした。李鎔賢氏の来日には、台風の影響も懸念されたが、無事会場に到着、「百済出土文字資料の用字」の題で、二〇〇八年新出土した百済羅州伏岩里木簡を中心に話ししていただいた。百済の都扶余から出土した木簡は知られていたが、地方からまとまって複数の木簡が発見されたのは、羅州伏岩里が初めてであった。この発見により、七世紀初めに地方

でも文字による行政が行われていたことが確認された。とりわけ、戸籍関連の用字の共通性が注目された。

李成市氏は、「新羅の新出土文字資料について——中城碑を中心に——」と題して、二〇〇九年五月に、浦項市興海邑中城里で発見されたばかりの中城里新羅碑を中心に新羅の金石文について講演された。韓国における金石文・木簡の公開、研究の現状をも踏まえ、迎日冷水碑（五〇三年）にも登場する人名「斯德智」を根拠に、中城碑の「辛巳」年が五〇一年であることを解明されるとともに、両者に共通する動詞「教」や威嚇の言辞にも言及され、興味の尽きないものであった。

乾善彦氏は、「日本における新出資料の増加と既存資料の見直し——新出資料から見えてくるもの——」と題して、韓の最新資料を踏まえて旧来の資料をどう解釈すべきかという観点から、正倉院文書を中心に自説を展開された。話しことばである生活のことばと書きことばである漢文とが、漢文訓読を介して接触し、その上に新たに誕生した「漢文のように書く書きことば」が変体漢文であるとまとめられた。筆者も訓読的思惟で書かれた言語は、漢語漢文とのクレオールと比喩される旨を述べたことがあり（漢字で書かれたことば——訓読的思惟をめぐって——『国語と国文学』一九九九年五月特集号「文字」）、その意味では賛同するところであるが、

後の討論でも問題となったのは「変体漢文」なる術語であった。

討論会では、この「変体漢文」という術語が適正であるか否か、文体として「変体漢文」なるものがあり得るのかなどこの語をめぐり種々の議論が沸き上がった。討論を聴きながら、四半世紀以上前、デビュー論文で安易に用いたこの語に対して、今は亡き小島憲之博士から「変体漢文体とは何ぞや」ときつく戒められたことを今更ながらに想起していた。

李成市氏からは最近では韓国でも「変体漢文（변체한문）」の語が使われているとの指摘もあった。毛利正守氏の提唱された「倭文体」（和文体以前の『倭文体』をめぐって）『万葉』一八五、二〇〇三年九月・「古事記の書記と文体」『古事記年報』四六、二〇〇四年一月）も、我が国古代の文体の呼称としては有効であるが、百済・新羅のそれをも含めて「倭文体」と呼ぶことは躊躇される。「倭臭（倭習）」の語も含めて、百済・新羅にも存するこうした現象をどう呼称するか、適切な術語の探索（もしくは創造）が、今後の重要な課題である。

例えば、昭和初期、鮎貝房之進は『俗文攷』を著し、その序言で次のように述べた。

本攷の目的は、古来朝鮮に於ける金石文古文書等に於

いて、漢文以外用ゐる来りし俗文を注釈し、史家の参考に資せんとするにあり。朝鮮に於いて今日発見されし金石文及び古文書等に現はれある俗文は左の二種類なり。

(一) 俗漢文
(二) 吏文

引用は『雜攷 俗字攷・俗文攷・借字攷』（国書刊行会、一九七二年）三四七頁

また、最近では、石井公成氏は、「三経義疏の共通表現と変則語法（上）」（『駒澤大学仏教学部論集』第四一号、二〇一〇年一〇月）において、三経義疏には朝鮮俗漢文の語法が含まれている可能性もあるため、「倭習」という語を用いず、「変則語法」「変則表現」という術語を使用した旨断つている。

これらの提言を踏まえて、日韓の古代漢字文研究に共通する術語を精練していく必要があるだろう。

二 相次ぐシンポジウム

二〇一〇年五月に開催された上代文学会シンポジウム「平城京研究と木簡研究の最前線」（詳細は『上代文学』一〇五号参照）に於いても、我が国出土の木簡に関する話題が

大きく取り挙げられたが、最近、こうした日韓の古代の漢字文化をめぐるシンポジウムが連続して開催されている。

今回のシンポジウムの直後の一月二日にも釜山大学校日本研究所主催による『東アジアの漢字文化の交流と受容——古代資料を通して見た疎通の様相の再照明』という国際シンポジウムが開催された。講演題目（拙訳）及び講演者は以下の通りである。

①「頗解屬文」の片鱗——〈百濟・倭〉の文字文化——
瀬間正之（上智大学教授）

②木簡を通して見た東アジア文字文化
権仁瀚（成均館大學教授）

③表示過程・状態持続を表す「中」とその来源
董志翹（南京師範大学教授）

④古代韓国漢字文化と『日本書紀』区分論
森博達（京都産業大学教授）

続いて、一二月四日・五日に開催された木簡学会では、韓国木簡学会から会長の朱甫暉氏をはじめ、権仁瀚氏など数名が招待され、日本の木簡研究についての報告（上代文学からの関心事としては、所謂「音義木簡」として周知される北大津遺跡出土木簡の再解釈があり、新たに可読となった十数字が明らかにされた）はもちろんのこと、橋本繁氏による「韓国における最近の木簡出土と研究状況」の

報告もあった。

さらにまた、一月十一日には、麗澤大学（言語研究センター主催）において、第二回『日・韓訓読シンポジウム』が開催された。講演題目及び講演者は以下の通りである。

① 宋版一切経に書き入れられた中国の角筆点

——醍醐寺藏本を基に東アジアの經典誦法を探る——

小林芳規（広島大学名誉教授）

② 日本語表記における音訓交用の精錬史

大銅隆（愛知県立大学教授）

③ 出土地から見た歌木簡

榮原永遠男（大阪市立大学名誉教授）

④ 華嚴経点吐口訣解説の成果と課題

朴鎮浩（ソウル大学校助教）

⑤ 木簡に見える古代韓国語表記

金永旭（ソウル市立大学校教授）

一〇月三十日の上代文学会シンポジウムに始まり、一月一日まで、一月半足らずの間に、筆者が参加しただけでも四つの日韓古代文字資料に関する大会が開催されたこととなる。

このような日韓の古代文字資料をめぐる共同討議の盛行の契機として、次の二点が挙げられる。

第一に、韓国における新出土文字資料の相次ぐ発見と、韓国木簡学会の設立が挙げられる。

金石文では、一九九五年には、「百濟昌王銘石造舍利龕」、二〇〇七年には「王興寺青銅製舍利函前面銘」、そして二〇〇九年には、「弥勒寺金製舍利奉安記」と百濟仏教、とりわけ舍利関係の金石文の発見が続き（これに関しては、拙稿「新出百濟仏教関係資料の再照明」「上代文学」一〇四号で紹介した）、新羅でも二〇〇九年に「浦項中城里新羅碑」「文武王陵碑」断片と一大発見が相次いだ。

今世紀に入り韓国出土木簡の点数もにわかに加え、二〇一〇年一〇月現在で古代木簡は、二一遺跡から五七〇点（内、墨書木簡四一一点）を数えるようになった（上述の釜山大学校日本研究所主催『東アジアの漢字文化の交流と受容―古代資料を通して見た疎通の様相の再照明』の権仁瀚氏の発表資料に拠る）。二〇〇四年には『韓国の古代木簡二〇〇四』（国立昌原文化財研究所）、続いて二〇〇六年にはその改訂増補版『韓国の古代木簡二〇〇六』が刊行され、写真と赤外線写真による韓国古代木簡の集大成が成された。日本においても二〇〇七年『韓国出土木簡の世界』（朝鮮文化研究所編・雄山閣）・二〇〇九年『咸安城山山城木簡』（早稲田大学朝鮮文化研究所・大韓民国国立伽耶文化財研究所編・雄山閣）・『東アジア古代出土文字資料の研究』（工藤元男・

李成市編・雄山閣)と出版が相次いだ。

この間、韓国でも二〇〇七年に韓国木簡学会が創設され、翌年には学会誌『木簡と文字研究』も創刊、既に四号を数えている。

第二に、韓国における訓点資料の発見が挙げられる。一九七三年に発見された『旧訳仁王経』五葉に傍点の返読記号による訓読が認められたことにより、韓国の漢文訓読は遅くとも一二世紀半ばまで遡ることが確認された。その後も続く口訣資料の発見を受けて、一九八八年には口訣学会が創設、学会誌『口訣研究』も一九九六年に第一輯が創刊されて以来、号を重ねている。一九九九年には南豊鉉氏の『国語史畧 위한 口訣研究』(太學社)が公刊された。そして、二〇〇〇年には、角筆による訓読の存在が明らかにされ、李丞宰氏を中心に『角筆口訣の解讀と翻譯』『角筆口訣写真資料』(太學社)も刊行され、巻を重ねている。また、二〇〇六年二月刊の『漢文讀法と東アジアの文字』(口訣学会編・太學社)は、韓国の口訣研究者と日本の訓点語研究者の交流の上に築かれた成果である。

以上、二つの契機を挙げたが、このような韓国での新資料の発見と解読に日本の研究者が大きく関与したことが今日の日韓の古代漢字資料研究の隆盛を導いたと言える。木簡に関しては平川南氏・李成市氏・三上喜孝氏などの古代

史研究者、口訣資料に関しては小林芳規氏をはじめとする訓点語研究者の寄与されたところが大きい。

したがって、古代文字資料を日韓の研究者が同一の組上で研究する方向性は発見当初から既に約束されており、それが今日の日韓の研究者による共同シンポジウムの隆盛に繋がったと言えるだろう。

また、上代文学会とも関係する研究会「セミナー・東アジア古典学のために」も見落とすことはできない。ここでも日韓の古代文字資料についての発表が少なくなかった。第四回に杉本一樹氏「正倉院文書の世界」、第八回に乾善彦氏「七〜八世紀の列島の文字世界」、第九回に三上喜孝氏「韓国古代木簡の現在」、第一四回に李鎔賢氏「百済の仏教と文字」、第一五回に金采洙氏「古代東アジア文学の基盤考察」など、日韓の研究者の交流が築かれた。

三 展望として

日本で出土した木簡は三〇万点を数えるが、韓国では、高麗時代のものを含めても未だに六〇〇点余りに過ぎない。しかし、その中からも「椋」「畠」をはじめ、従来我が国で創られた国字とされていたものが発見されている。韓国古代木簡を踏まえずに、我が国古代の文字文化を語ることは不可能になりつつある。

「変体漢文」「倭習（倭臭）」の語については先に触れたが、「漢字文化」の語についても、最近次のような意見が出された。

近年、一国史観を脱し、東アジアの文化を総合的に考察しようとする試みが、さまざまな分野で行われているが、そのためには、漢文を従来の規範的漢文のみにとどめず、漢字で書かれたすべての文体をそこに含め、それら多様な文体の実態とその相互関係を説き明かすことが必要であると考える。そのためには漢字文化圏よりも漢文文化圏という呼称の方が、より相応しいであろう。

金文京『漢文と東アジア—訓読の文化圏』（岩波新書・二〇一〇年八月刊）二二九～二三〇頁

金文京氏のこの著書は、東アジアの訓読を考える上で必読書となったとも言い得る好著であるが、最後の最後に「漢文文化圏」という呼称を提起された。この提起は極めて重要であり、その意味も充分理解され、共感を禁じ得ないが、「椋」「鳥」の問題を考えれば未だ「漢字文化圏」の呼称も棄て難いように思えてならない。

一九六一年平城宮跡から第一号木簡が発見されて以来、我が国では既に三〇万点に及ぶ木簡が出土している。一方韓国では、一九七五年雁鴨池で韓国最初の木簡が発見され

たものの、出土木簡が一〇〇点を超えたのは一九九〇年代に入ってからである。韓国でも今後相当数の木簡の出土が見込まれる。

新出資料を踏まえて文字文化を問い直す作業は、今後も継続的に行われなくてはならない。